

- 1 派遣期日 平成 29 年 11 月 15 日（水）
- 2 研修先 学校名（会場名） 静岡県牧之原市菊川市学校組合立牧之原中学校
所在地 静岡県牧之原市東萩間 2079-9
<http://makichu.sakura.ne.jp/>

3 研修内容

（1）全体会

- ア 研究主題 自他を尊重し、互いに認め、高め合う生徒の育成
～一人一人がかけがえのない存在であることを自覚するとともに、
差別や偏見をなくし、自他の生命と人権を尊重し合う生徒を育てる～

イ 主題設定の理由

静岡県教育委員会では、「人権を尊重する態度や行動力の育成」を目指しており、そのための柱として「授業で行われる人権教育～人権に対する知的理解～」と「学校教育全体を通じた人権を尊重する教育」を挙げている。

牧之原中学校では、それを受けて「自分も他人も大切にできる生徒の育成」を目指すこととした。牧之原中学校は茶畑の中に立つ中学校で、市町村をまたぐ牧之原台地に住む農家の人々の願いで設立された保育園、小学校も併設された学校組合立の学校である。各学年単学級の小規模校であり、人間関係の固定化から受動的・消極的な生徒が多いと学校はとらえている。

牧之原中学校では、「自分も他人も大切にすること」の根本は生徒理解であると考えた。そこで、少人数校の利点を生かし、一人一人が抱える悩みを全教職員で共有する努力をすること、自分・他人が大切にされているという思いをもたせることをとおして、自己肯定感の向上を図ることとした。また、そのことは生徒指導力の向上や学力の向上にもつながると考え、本主題を設定した。

具体的な施策としては、教師・生徒同士が積極的に関わり合うことを中心に据えている。先生が生徒に、生徒が生徒に、異学年が異学年に積極的に関わることで、生徒の新たな一面を積極的に発見したり、気付いたりしていこうと考えた。



図1 一面に広がる茶畑

（2）授業参観

- ア 確かな学びづくり部の校内研修テーマ：「関わり合いで学びを深めよう」

- イ 参観学年及び教科：中学校 2 年生 社会科「中部地方」

ウ 授業の実際

① 導入場面での関わり（図2・図3）

授業の導入では、中部地方の特産物の実物を用意し、教師が3種類に分類した。生徒は分類の根拠を考え、積極的に発表していた。わかりそうでわからない課題により、近くの友達とアイデアを交流するなど、関わるきっかけになっていた。



図2 導入場面



図3 アイデアを交流する姿

② 展開場面での関わり（図4）

追究する課題を決めた後は、個人で考える時間を確保した後に、同一課題の生徒で小グループを作って調べ学習を行っていた。

個人追究の時間は、生徒は各種資料を用いて熱心に調べ学習をしていた。特に心に残ったのは、先生が生徒全員に一人ずつ声をかけ、ヒントを出したり励ましたりしていたことである。21名の少人数クラスであるとはいえ、全員に声をかけることはなかなか難しいことと思うが、自然な雰囲気に関わっていた。ヒントをもらった生徒は軌道修正をし、励まされた生徒は、さらに自信を持って取り組むことにつながっていたように思う。



図4 一人一人と関わる先生

小グループでの話し合いも活発であった。発表することが苦手な生徒もいたようだが、生徒の特性をよく理解できる少人数クラスのよさを生かし、友達がフォローしている姿が印象的だった。

（3）分散会（主な意見）

- ア 一人一人に声をかける先生の関わりが素晴らしい。
- イ 意図的グループではなかったが、生徒の個性が生かせるように関わり合う生徒の姿が見られてよかった。
- ウ 課題が曖昧（地域と盛んな産業との関わりを調べよう）だったので、もっと焦点化（盛んになった理由を調べよう等）されるとよかった。

（4）講師指導（静岡県教育委員会教育政策課人権教育推進室 芳岡教育主査）

- ア ユニバーサルデザインの授業には「言葉遣い」や「感謝の表現」など生徒の自己存在感を高める工夫が必要である。本日の授業や教室環境は、その意味でユニバーサルデザインを大切にしていた授業だったといえる。
- イ 本日の授業は一人一人が活躍できる、発言できる機会が確保されていた。人権尊重に配慮した授業が実践されたといえる。
- ウ 掲示物には教師の温かいコメントが書き加えられていた。自分が認められていると感じられるコメントにより、生徒の自己肯定感を高めることができる。

4 感想

訪問校は、私の勤務している平沢中学校と同様に、生徒数が少ない小さな学校である。一度人間関係がこじれると、立ち直るのに時間がかかることや、全体的に仲が良いが、新たな人間関係を築くことに不安を感じていたり、積極的になれなかったりする生徒が多いことなど共通の課題が多く、「互いに認め、高め合う」ことを目的とした取り組みは非常に参考になった。

授業中、教師が生徒に関わることは当たり前のことと思っていたが、「関わる」ためには、関わる必要性が必要であり、その必要性を準備することは重要な教材研究の一つであることに気付かされた。また、生徒同士の関わりで相手の新しい一面を発見させるという目的意識も新鮮に感じた。新しい一面を発見させるためには、生徒の長所を把握しておく、もしくは新しいことにチャレンジする機会を設ける必要がある。簡単そうに見えてなかなか計画・実行ができないことである。

自分自身の指導を振り返ると、いかにわかりやすく教えるか、効率よく授業を進めるかという点に重きが置かれていたと思う。生徒指導面においても、気付かせることよりも諭すことに重きを置いていたと反省する。

今後は牧之原中学校の取り組みを参考にし、生徒の長所を引き出し、活躍の場を意図的に設ける授業実践に取り組んでいきたい。また、これまで以上に生徒に積極的に関わり、生徒同士を関わらせ、一人一人の個性の発見及び伸長を図る生徒指導を行っていききたいと思う。